

1831年 ビュルガーがシーボルトに出した書簡

抜刷:九州大学総合研究博物館研究報告 第11号 pp.19-52.2013年3月

野藤 妙

Tae NOFUJI

海老原 温子

Atsuko EBIHARA

リザ・エライン・ハメケ

Lisa Elaine Hammeke

宮崎 克則

Katsunori MIYAZAKI





1831年 ビュルガーがシーボルトに出した書簡

野藤妙、海老原温子、リザ・エライン・ハメケ、宮崎克則
(Lisa Elaine Hammeke)

The letter from Bürger to Siebold in 1831

Tae Nofuji · Atsuko Ebihara · Lisa Elaine Hammeke · Katsunori Miyazaki

西南学院大学国際文化学部：〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92
The Seinan University, Nishijin 6-2-92, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

はじめに

1823年、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold : 1796-1866)は日本の出島商館へ医師として赴任した。シーボルトが日本へと派遣された目的には、商館の医師のほか、オランダ国王の命による日本での博物学調査があった。そのため、シーボルトにはオランダ政府より研究費が交付されていた¹。来日したシーボルトはさっそく調査を開始したが、博物学の調査に専念するため、1824年には自分の博物学調査のための画家と助手の派遣を要請した²。その要請により、1825年に画家として来日したカレル・ヒュベルト・ドゥ・ヴィレニューフェ(Carel Hubert de Villeneuve : 1800-1874)とともに助手として来日したのが、ハインリッヒ・ビュルガー(Heinrich Bürger : 1806?-1858)であった。

シーボルトの史料が所蔵されているブランデンシュタイ

ン城博物館を見ると、様々な人からシーボルトへ送られた書簡、またシーボルトが送った書簡の控が多く遺されていることがわかる。それらの史料は、シーボルトの日本研究への態度や人物像、人間関係などがわかる、非常に興味深い内容となっている。本稿は、それらの書簡の中でも、1831年12月1日出島にいるビュルガーがオランダへ戻ったシーボルトに出した書簡の翻訳を行ったものである。この書簡には、特に動植物などの日本の自然史に関するビュルガーの報告が記されており、シーボルトやビュルガーの博物学調査の過程をうかがい知ることができる。

以下、本稿の構成は、1.書簡の解説、2.凡例、3.書簡の翻刻、4.翻訳文、となっている。

¹ 栗原福也訳『シーボルトの日本研究』平凡社、2009年。

² 栗原福也訳『シーボルトの日本研究』、1824年11月26日の記事。

1. 書簡の解説

シーボルトの日本調査とビュルガー

石山禎一氏の「"Dr. Heinrich Bürger"の生涯について」³を参照すると、1806年1月20日にドイツ系ユダヤ人の家系であるサミュエル・ビュルガー (Samuel Bürger) とエヴァ・メイヤー (Eva Meyer) の間の子供としてハーメルンで生まれた⁴。1821年10月25日にドイツのゲッティンゲン大学の数学科に入学し、その翌年には天文学科に転科しているが、薬剤師の資格を得ることになった理由については不明ということである。1823年8月頃までは大学に籍を置いていたが、同年9月6日にジャワに向けアムステルダムから出港し、バタヴィアの病院で見習い薬剤師として勤務した。1825年1月14日に見習い薬剤師から三級薬剤師へと昇進したビュルガーは、同年日本へと赴任することとなった⁵。

1825年12月2日付のシーボルトからオランダ東インド総督への報告によると、ビュルガーはシーボルトの助手として、出島では鉱物学、物理学、数学などの調査活動をゆだねられていたという⁶。またシーボルトの要請により、1826年の商館長ステュルレル (Johan Wilhelm de Sturler : 1776-1855) の江戸参府にも同行することができた。シーボルトの参府日記には、例えば「上述した峠の麓でビュルガー君は斑片岩を、山頂では斑岩様構造の玄武岩円丘に角閃石が混じっているのを観察した」⁷とあり、調査活動を行っている様子がかがえ、他にも温泉の成分分析や緯度・経度の計測などを行っている。ビュル

ガーは、1827年に東インド政庁から帰還命令が届き、一度バタヴィアへ戻ったが、今度はシーボルトの後任として1828年に再び来日した⁸。

シーボルトが日本を離れた後、ビュルガーは日本での調査を行い、シーボルトの日本研究に助力した。ビュルガーは1832年5月に茶の種子や苗木を持ってジャワに戻り、実験農業園で耕作を行い、1833年6月にはオランダ東インド政庁より茶樹栽培検査を命じられた⁹。そして1834年にその仕事を終えた後再び来日した。その後日本での調査を終えたビュルガーは離日し、ジャワに1835年6月14日到着した。ビュルガーは日本滞在中1830年、1831年、1832年、1834年の計4回ライデン国立自然史博物館へ標本等の発送を行っている¹⁰。そのような中で送られたのが、本稿で紹介する書簡である¹¹。1831年12月1日付の書簡は、出島からビュルガーによって発信されたものであり、洋紙にドイツ語で記されている。現在シーボルトの子孫であるブランデンシュタイン家に所蔵されている。

ブランデンシュタイン家所蔵のシーボルト・コレクション¹²

ここで、ビュルガーの書簡が所蔵されているブランデンシュタイン家文書について概観しておこう。成立過程については、コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン「ブランデンシュタイン城の「三人の日本シー

³ 石山禎一「"Dr. Heinrich Bürger"の生涯について」『法政研究』第22号、1970年。

⁴ 1804年説もあり。

⁵ その後二級薬剤師に昇進

⁶ 栗原福也訳『シーボルトの日本研究』

⁷ 齋藤信記『江戸参府紀行』平凡社、1967年。

⁸ 山口隆男「シーボルトとビュルゲルによって採集され、オランダの国立自然史博物館、ロンドンの自然史博物館ならびにベルリンのフンボルト大学付属自然史博物館に所蔵されている日本産の魚類標本類について」『CALANUS』特別号4、2003年。

⁹ 石山禎一「シーボルト 日本の植物に賭けた生涯」里文出版、2000年。

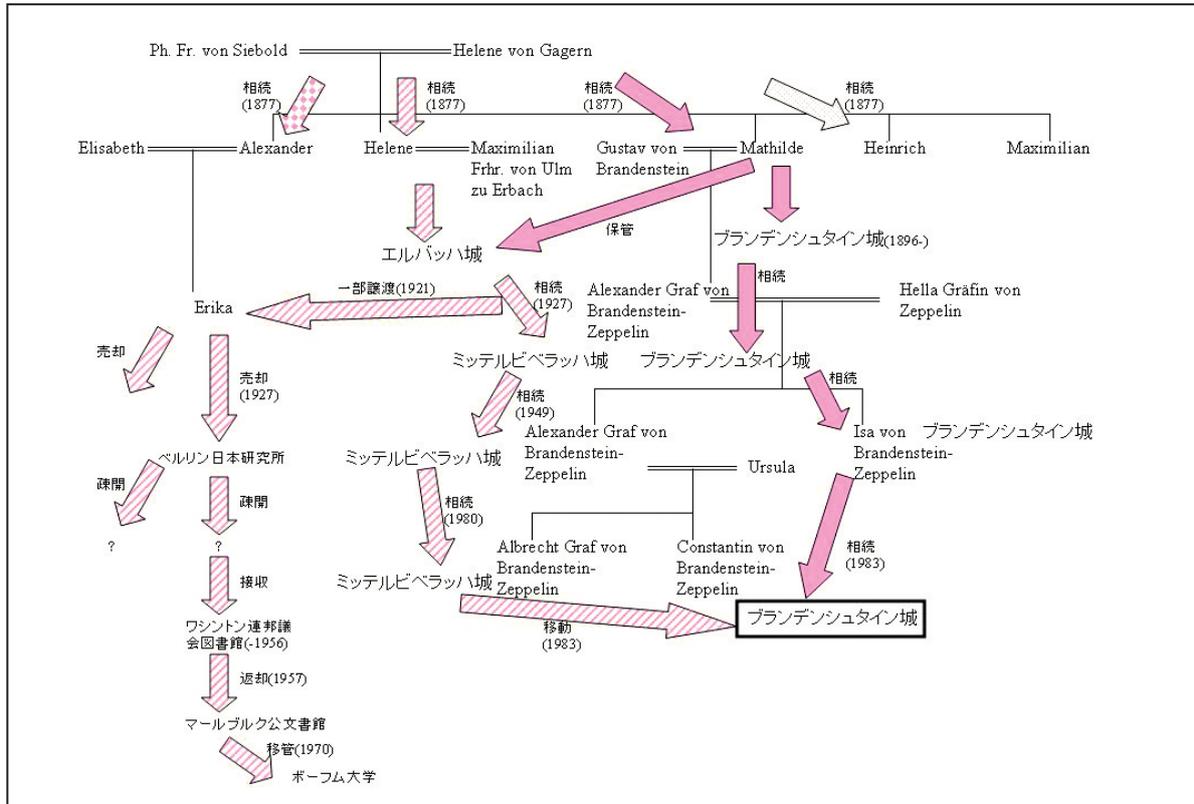
¹⁰ 山口隆男「シーボルトとビュルゲルによって採集され、オランダの国立自然史博物館、ロンドンの自然史博物館ならびにベルリンのフンボルト大学付属自然史博物館に所蔵されている日本産の魚類標本類について」

¹¹ ブランデンシュタイン家文書B17. Fab. 276. また、ブランデンシュタイン家文書の文書類は長崎市教育委員会によりマイクロフィルム化され、長崎のシーボルト記念館でも書簡をマイクロフィルムで閲覧することができる。マイクロフィルム番号110091

¹² C. フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン、宮坂正英訳「ブランデンシュタイン城の「三人の日本シーボルト」の遺産—ミッテルビベラッハ及びブランデンシュタイン文庫の成立とその内容—」『鳴滝紀要』創刊号、1991年。

宮坂正英「古城に眠るシーボルト文書—フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家文庫の成立と特色」『黄昏のトクガワ・ジャパン シーボルト父子の見た日本』(ヨゼフ・クライナー編)、日本放送出版協会、1998年

Fig. 1 ブランデンシュタイン家文書成立の大まかな流れ



(参考:C.フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン、宮坂正英訳「ブランデンシュタイン城の「三人の日本シーボルト」の遺産」)

ボルト」の遺産」、宮坂正英「古城に眠るシーボルト文書—フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家文庫の成立と特色」で詳細に述べられている。

シーボルトの妻であるヘレーネ(Helene von Gagern)が亡くなった1877年に、長男アレクサンダー(Alexander von Siebold)、長女ヘレーネ(Helene Freiin von Ulm zu Erbach)、次女マチルデ(Mathilde von Brandenstein)、次男ハインリッヒ(Heinrich von Siebold)にシーボルトの遺品が相続された。長女ヘレーネは、マキシミリアン・ウルム・エルバッハ男爵(Maximilian Freiherr von Ulm zu Erbach)と結婚し、エルバッハ城に遺品を保管していた。次女マチルデは、グスタフ・フォン・ブランデンシュタイン氏(Gustav von Brandenstein)と結婚し、ブランデンシュタイン城を購入して、1896年ころにはシーボルトの遺品をブランデンシュタイン城で保管した。長女ヘレーネとエルバッハ男爵との間には子供がいなかったため、次女マチルデとブランデンシュタイン氏の子供であるアレクサンダー・フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン伯爵(シニア)(Alexander Graf von Brandenstein-Zeppelin)が遺品

の相続人となった。その際に、シーボルトの長男アレクサンダーの長女であるエリカ(Erika Freiin von Erhardt)が遺品の相続権を主張し、1921年にエルバッハ城に保管されていた遺品の一部が譲渡された。エリカに渡ったシーボルトの遺品の大部分は、1927年にベルリンの日本研究所に購入されることとなった。その後、日本研究所に所蔵されていた遺品は、第二次世界大戦の際、数カ所に分けて疎開された。その疎開先のひとつに所蔵されていた遺品はアメリカ軍によって没収され、1957年にドイツに返還された。そして1970年、ボーフム大学の東亜学部へと移管された。一方、アレクサンダー・フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン伯爵(シニア)は、シーボルトの長女ヘレーネと次女マチルデの相続した遺品を相続することとなった。そしてエルバッハ城に保管されていた遺品は、彼の住居であるミッテルビベラッハ城に移された。つまり、ミッテルビベラッハ城とブランデンシュタイン城で遺品が保管されることとなった。その後、長女であるイザ・フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン氏(Isa von Brandenstein-Zeppelin)はブランデンシュタイ

ン城とそこに保管された遺品を相続し、アレクサンダー・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏 (Alexander Graf von Brandenstein-Zeppelin) は、ミッテルビベラッハ城とそこに保管された遺品を相続した。その後、現在のブランデンシュタイン家の当主である、コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏 (Constantin von Brandenstein-Zeppelin) は、イザ・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏からブランデンシュタイン城を相続し、コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏の兄、アルブレヒト・グラーフ・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏 (Albrecht Graf von Brandenstein-Zeppelin) はミッテルビベラッハ城を相続した。そして、1983年にミッテルビベラッハ城に保管されていた遺品がブランデンシュタイン城に移動され、一括して管理されることとなった。

書簡からわかるビュルガーの日本調査

次に書簡の内容を見てみよう。この書簡に関しては山口隆男氏により、シーボルトの魚類図を描いたのが川原慶賀である証拠として一部紹介されている¹³。川原慶賀とは、「出島出入絵師」としてシーボルトを始めとするオランダ商館員の求めに応じ、動植物画や風俗画などを描いた長崎の絵師である。これまで、描いたのは恐らく慶賀であろうと、推測の域を脱しなかった魚類図の絵師が慶賀であることが、この山口氏の指摘により決定的なものとなったと言えよう。しかし、この手紙の内容はそれにとどまらず、商館員の日本研究や商館員とその家族の日本での生活など、さまざまな興味深い記述が見られる。

まず日本研究に関して、魚類、甲殻類、爬虫類、鳥類、ほ乳類、植物について、発送品や収集状況がそれぞれ述べられている。魚類、甲殻類、爬虫類は川原慶賀、ほ乳類はフィレニューフェが図を描いて発送する旨が記されており、これらは現在ライデン国立自然史博物館に所蔵されている魚類図や甲殻類図であると思われる。書簡の中では、魚類図は400図を描かせたことが記されているが、ライデン国立自然史博物館に現存している魚類図は259図である¹⁴。ビュルガーの指示によって描か

れた慶賀の魚類図、甲殻類図は非常に細密で正確に描かれており、シーボルト『日本動物誌』の原画として多く活用された。また、ビュルガーは魚類については200種、甲殻類については25種の詳細な説明を送付すると述べている。これらの説明文にあたるのが、ライデン国立自然史博物館に保存されている観察記録であると考えられる。その観察記録には、漢字やカタカナによる名前の記述や、生物の特徴、生息地、日本での食用法などさまざまな情報が記されている。魚類の観察記録はNo.1からNo.200まで、甲殻類の観察記録はNo.1からNo.25までであり、書簡に記された種類の数とそれぞれ合致する。さらに、観察記録に記された番号は慶賀の図に付された番号とも一致している。例えば、Fig. 2にあげている画像は、No. 88のヨコワカツオの観察記録であり、慶賀の図のNo. 88 (Fig. 3) が、その観察記録に対応するヨコワカツオの図ということになる。観察記録に記された「No.88」という部分を見ると、「88」という数字の部分が、その他の文章のインクと異なるインクで書かれていることがわかる。このことから、「No.」という文字だけをまず記し、番号の数字は空欄にしておき、ヨコワカツオに関する記事を書いた後で番号を記したということが推測される。さらに、観察記録の番号と慶賀の図の番号を比較すると、観察記録の「88」という数字と図に付された「No.88」の文字は同じインクで記されていると思われる。全てを同じ方法で整理したかは不明であるが、以上のように、書簡で言及された図や観察記録を現存する史料と比較検討した結果から、魚を入手したビュルガーはその特徴などを記した観察記録を作成し、慶賀に図を描かせた後、観察記録と図を対応させながら両方に同じ番号を付けるという方法で資料の整理を行っていたことが想定できる。

さらに、書簡の冒頭から、今回翻訳を行った書簡は、1830年12月22日付のライデンからのシーボルトの書簡に対する返事であることがわかる。1831年6月29、30日にオランダ船が長崎に来航した際に、その1830年12月22日付のライデンからのシーボルトの書簡がビュルガーの手に渡り、その返事を船が出航する前に書いたと考えられ

¹³ 山口隆男「シーボルト、ビュルガー、川原慶賀と日本の魚類学」『鳴滝紀要』第17号、2007年。

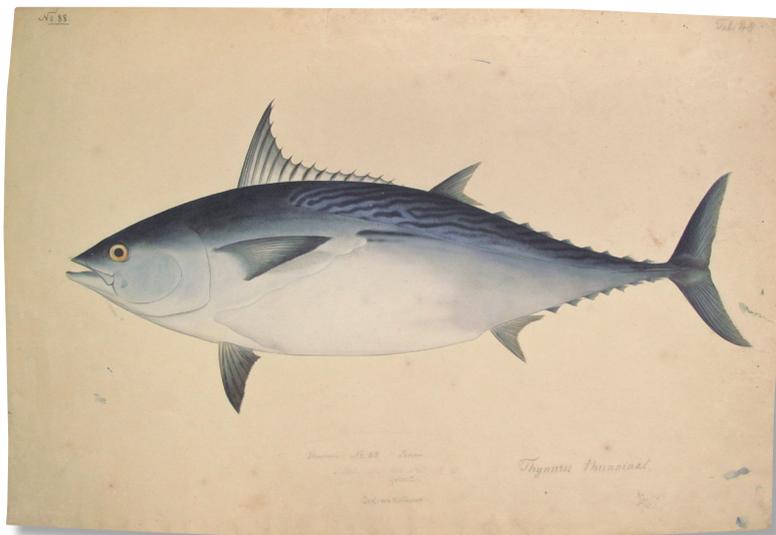
¹⁴ 山口隆男「シーボルト、ビュルガー、川原慶賀と日本の魚類学」。また、甲殻類は53図現存。

Fig. 2 「ヨコワカツラ」のビュルガーによる観察記録

No 88.
Pisces Acanthopterygii..
Fam: V...
Scomberoides, Cuv.:
Thynnus, Cuv: Thynnus thunina!
Thynnus Tokowakatsuwa, Jap: 鰯 鱈
魚 鱈
魚 鱈
Lijf: dik, rond, vlezig, spits, conisch in den staart
loopende, met zeer kleine nauwelijks zichtbare schub,
.. ben bezet ..
Kop: kort, dik, breed, conisch, geheel glad, van vooren
stomp ..
Mond: middelmatig groot ..
Kaken: beide even lang, met een zij, kleine scharp.
.. achtige tanden gewapend ..
Tong: breed, ovaal, glad ..
Keel: nauw, scharpachtig ..
Lippen: dun ..
Oogen: op zijde aan den kop, over de hoeken van den
mond, groot volmaakt rond ..
Iris: geel ..
Neusgaten: dubbel van elkander afstaende, boven aan
den kop, het voorste klein rond, het achterste nauw
in de gedaante van een dwarsstrop, ligt onder de
voorkringen ..
Kieuwendekkeels: uit twee, gladde, groote rondachtige
platen, zonder schubben, welke zich enigzins naar
achteren uitstrekken ..
Kieuwenolies: met zeven stralen, door de kieuwen
.. de keels bedekt ..
Kieuwenopeningen:

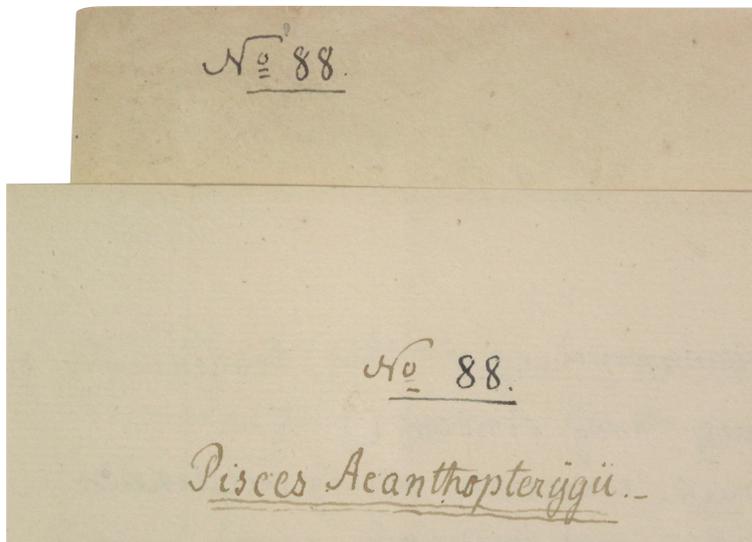
ライデン国立自然史博物館所蔵

Fig. 3 川原慶賀による魚類図「ヨコワカツラ」



ライデン国立自然史博物館所蔵

Fig. 4 No. 88「ヨコワカツラ」の番号比較、魚類図(上)と観察記録(下)



る。シーボルトが出した書簡の正本は確認されていないが、ブランデンシュタイン家文書の中に書簡の副本¹⁵と思われる史料があり、その内容を知ることができる。シーボルトの書簡の中では、特に植物についての記述が目立つ。植物の標本の作り方や梱包する箱についての事細

かな指示や茶の種などの要求がなされている。本稿で取り上げたビュルガーの書簡を見ると、シーボルトの要求に対してその何倍もの植物を送付することを述べており、要望に応じていることがうかがえる。

¹⁵ ブランデンシュタイン家文書K9. Fab. 9. シーボルト記念館所蔵マイクロフィルム番号41299

商館員とその家族の生活について

家族に関しては、其扇の結婚などについて記されている。シーボルトが日本を離れた後、其扇は伯父の家に同居しており、書簡には、「1000テールの現金を彼女(其扇)は彼女の伯父さんに預けていました。」とあることから、シーボルトが与えた其扇の資産は伯父さんが管理していたことがうかがえる。しかし、その同居生活は長く続かず、前年にビュルガーが送った書簡¹⁶の中では、「其

扇は、3年間は結婚しないと言っている」、と述べていたものの、現在は鼈甲細工職人と結婚しており、伯父さんの家を出たということが書簡に記されている¹⁷。また、ビュルガーの妻であり其扇の姉である千歳が亡くなり、ビュルガー離日後は其扇が息子アサキチの面倒を見ると言ったこと、アサキチのためにビュルガーが買った麴屋町の家に、其扇はおいねと夫と暮らしていることも述べられている。

Fig. 5 イトセ、ソノギ(シーボルト『NIPPON』)



九州大学所蔵

¹⁶ ブランデンシュタイン家文書B17. Fab. 278. マイクロフィルム番号110104

¹⁷ 結婚相手は籠町の和三郎という人物であった。古賀十二郎『出島遊女と唐紅毛人』後編、長崎文献社、1969年。

特に興味深いのは、其扇やおいねの生活費について述べている点である。書簡の中では、「私たちはコンプラ仲間に預けて利金を得るようにしました。…しかし一方で1000テールの資本は十分ではありません。今はコンプラ仲間から12パーセントの利子をもらい、それは月に10テールの利益になります。それは私たちの小さい家での家計にとっても、十分ではありません。私はフィレニューフェに今年1500テールの特別な商取引をすることを申し出ました。ここから500テールの現金が出ます。この現金を1000テールに加えるとコンプラ仲間への資金が1500テールになり、月々15テールの利益がもたらされます。其扇は9月1日から毎月15テールを利息として受け取っています。」と書かれている。コンプラ仲間とは、諸色売込人のことであり、買い物自由にできないオランダ商館員に代わり、日用品や食物、ときには人を調達する株仲間として知られているが、このように資金を預かり残された家族へ利子を払うということも行っていたということがわかる。さらに、金1両=6テール¹⁸=銀60匁とすると、月に10テールは金では約1.7両、銀では100匁ということになり、その金額では一家が生活するのに不十分であることをシーボルトへ訴えていたということがわかる。

古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』では付録として、当時ベルリンの日本研究所に所蔵されていた、其扇がシーボルトに宛てて出した書簡が紹介されている。その中には本稿で紹介する書簡と同じ1831年に記されたものがあり、同じ時期にシーボルトへ送られたと推測される。この其扇の1831年10月24日(10月24日は和暦、西暦では11月27日)付の書簡¹⁹を見ると、「きんのことも、びるげる様の御せ己(王(わ)カ、引用者注)ニ而おぢ方よりとりかへし、又ひるける様より五貫目おくり下され、二口メ十五貫目こんふらへあづけまゐらせ候。毎月百五拾匁つ、こんふらより利ぎんうけとり申候。是みなびるげる様、でひれにふる様のさしつにまかせ、かよふにとりはからひもらひまゐらせ候。」とあり、15貫目は1500テール、150匁は15テールなので、ビュルガーの書簡の内容とも合致する。

これまで、オランダ商館員が日本を離れる際に残される家族の生活の面倒を見るために実際にどのようなこと

を行っていたのか、ということについてはあまり注目されることはなかった。書簡によると、ビュルガーは息子アサキチのために3000テールを資金として用意していたことがわかり、自分が日本を離れることになっても、それらの資金をコンプラドールに預けることによって費用を遺していたことが明らかとなった。また、商館員の帰国により日本に遺された妻子の世話を日本に残っている商館員たちが行っていたということがわかった。其扇が日本での生活について、前述の其扇の書簡のなかで「みなびるげる様のさしづ、大いにせ己(王(わ)カ、引用者注)に相なりまゐたせ候間、御前様よりも幾もよろしく、よふびるげる様へ御礼くれへも御たのみ入まゐらせ候。」とシーボルトへ記しているように、ビュルガーの書簡からは、其扇とおいねを親身になって世話をしている様子が見えてくる。

このように、ビュルガーがシーボルトへ出した書簡の内容は、具体的な日本での調査・収集活動の実態やシーボルト、ビュルガーとその家族の様子や生活費、またオランダ商館員の動向など多岐に及び、オランダ商館員に関する研究にさまざまな視点を与える可能性を有した史料である。

¹⁸ 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の捕鯨図」『九州大学総合研究博物館研究報告』第7号、2009年。

¹⁹ 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編、長崎文献社、1969年。ただし其扇の直筆ではなく代筆である。

2. 凡例



- ・ブランデンシュタイン城博物館所蔵、文書番号B17. Fab.276、Bürgerの手紙1831年を使用。
- ・原文の体裁通りに翻字したが、抜けていると思われる文字、単語は()で補い、又必要な箇所には[→]で現代使われているドイツ語を加えた。
- ・生物分類上の種Species(英語)・Spezies(ドイツ語)、甲殻類Crustacean(英語)・Krustazeen(ドイツ語)は原文のまま統一しないで翻字した。
- ・貨幣単位の記号 *fl* は文中ではThijlとした。
- ・原文に下線が付してある単語・改ページを示す単語には原文通り下線を付した。
- ・訳文中意を明確にするために補った語句には()を付した。
- ・訳文中の外国人名・地名には原綴にカタカナ表記を()で加え、次出からはカタカナのみにした。
- ・日本人名は原綴に(カタカナ・漢字)を加えた。

Dezima, 1ten December 1831.

Werthester [->Wertester] Freund !

Ihren mir so lieben Brief aus Leyden vom 22 ten December 1830 habe ich met [->mit] den diesjährigen Schiffen erhalten , es war mir sehr angenehm Ihre glückliche Ankunft in Holland sowohl als die weitere günstige Stimmung uns(e)rer wissenschaftlichen Unternehmungen aus Japan daraus zu ersehen, und ich beeile mich [, mich] mit Ihnen recht aus Herzensgrunde weitläufig hierüber zu unterhalten. Gleich nach Ihrer Abreise von [->aus] Japan, habe ich mich wie ich bereits im vorigem Jahre Ihnen geschrieben habe, mit Lust und Liebe an die Fische gemacht, mit dem gewünschtem Erfolge dass jetzt bereits (bei den?) 400 Species, nach dem Leben durch Toyoske gezeichnet sind, wovon bereits 200 mit ausführlichen Beschreibungen von mir versenden [->versehen worden] sind, worunter Sie wahrscheinlich viel Neues finden werden. Ich habe mich pünktlich [->punktgenau] an Ihre Instruction [->Instruktionen] gehalten, und Alles bekannt oder unbekannt zeichnen zu lassen, um auf diesem Wege ein Ganzes zu liefern von allem was die japan[i]sche Seen und Flüsse an Fische ausliefert. Unter der

letzten

※ 原文1ページ左余白に書き込みがあるが、読み取れる文字Bürger やSieboldにHerrなどの敬称がついていることから、デュルガーやシーボルト自身が書き込んだのではなく、後の人がこの文書を整理するために書き加えたものと思われる。

letzten Besendung finden Sie viele Flussfische, welche
ich bereits bis auf 100 Species gebracht habe, wovon jedoch
noch viele ungezeichnet sind. Im ganzen genommen sind
mir etwa 700-800 Species Fische alhier bekannt geworden
wovon bereits 500-600 weitläufige Beschreibungen um
mit den Zeichnungen versondert zu werden fertig liegen; -
Ich denke jährlich hieron eine Besendung von 100 Exemplare
zu liefern; Sie erhalten ^{werden} darum im folgenden Jahre ~~das~~
die dritte Lieferung bekommen, es sol mir sehr angenehm
seyn hierüber etwas von Ihnen zu hören. -

Die Krustaceen habe ich ebenfalls wie die Fische
begonnen zu beschreiben und zeichnen zu lassen, vooral
im letztem Jahre wo die Fische einigeris seltener für
mich geworden sind, Sie erhalten davon in diesem Jahre
die erste Lieferung von 25 Beschreibungen mit Zeichnun-
gen, welche Ihnen nach Ihrem Briefe zu urtheilen, wo
Sie mich noch darauf aufmerksam machen, sehr ange-
nehm seyn wird. Die durch Ihnen in Japan gefundenen
80 Species Crustaceen habe ich bereits auf 120 gebracht
wovon die Duplicate, sowohl getrocknet als auf Druck
in diesem Jahre versonden werden. Ich werde im folgen-
den Jahre damit fortfahren; und auch hier alles
bekannt

letzten Besendung finden Sie viele Flussfische, welche ich bereits bis auf 100 Species gebracht habe, wovon jedoch noch viele ungezeichnet sind. Im ganzen genommen sind mir etwa 700-800 Species Fische alhier [→hier] bekannt geworden, wovon bereits 500-600 weitläufige Beschreibungen um mit den Zeichnungen versenden [→versendet] zu werden fertig liegen. Ich denke jährlich hiervon eine Besendung von 100 Exemplare(n) zu liefern. Sie erhalten werden darum im folgendem Jahre das die dritte Lieferung bekommen, es sol(l)mir sehr angenehm seyn [→sein] hierüber etwas von Ihnen zu hören.

Die Krustazeen habe ich ebenfalls wie die Fische begonnen zu beschreiben und zeichnen zu lassen, vooral [→vor allem] im letzten Jahre wo die Fisch einigzins [→einigermaßen / ziemlich] seltener für mich geworden sind, Sie erhalten davon in diesem Jahre die erste Lieferung von 25 Beschreibungen mit Zeichnungen, welche Ihnen nach Ihrem Briefe zu ertheilen [→erteilen], wo sie mich noch darauf aufmerksam machen, sehr angenehm seyn [→sein] wird. Die durch Ihnen [→Sie] in Japan gefundenen 80 Species Crustacean habe ich bereits auf 120 gebracht wovon de [→die] Duplicate [→Duplikate], sowohl getrocknet als auf Druck in diesem Jahre versenden [→versendet] werden. Ich werde im folgenden Jahre damit fortfahren, und auch hier alles

bekannt

bekannt oder unbekannt durch Toyoske zeichnen
zu lassen, und hoffe im nächstem Jahre Ihnen die
wiederum eine Lieferung von 50 Species gezeichnet und
beschrieben zukommen zu lassen.

Reptilien erhalten Sie in diesem Jahre Alles was
nur unter meinen Händen gekommen ist, und wahrschein-
lich eine ziemlich vollständige Versammlung; doch habe
ich vergessen einige Notizen über die Farbe der Individuen
beizufügen, welches ich im nächstem Jahre sicher thun werde,
wo ich mich ausführlich mit Reptilien beschäftigen werde
um dieselben im Falle Sie Toyoske zeichnen kann, gleich
den Fische und Crustaceen, jährliche Lieferungen von
Zeichnungen und Beschreibungen zu versenden. Von
Ihren grossen Aohi aus den Gebirgen von Nippon, befin-
den sich auch wiederum zwey schöne Exemplare bei der
diesjährigen Versendung als auch einige sehr seltene
Saurier.

Vogel habe ich in diesem Jahre sehr vollständig
zusammengedrückt, Reisen über Kinkui und Nippon haben
das meiste geliefert, die diesjährige Besendung beläuft
sich ungefähr auf 160 Species in 600 Exemplare, worunter
Sie

bekannt oder unbekannt durch Toyoske zeichnen zu lassen, und hoffe im nächsten Jahre Ihnen die wiederum eine Lieferung von 50 Species gezeichnet und beschrieben zukommen zu lassen.

Reptilien erhalten Sie in diesem Jahre alles was nur unter meinen [→meine] Händen gekommen ist, und wahrscheinlich eine ziemlich vollständige Versammlung [→Sammlung] ; doch habe ich vergessen einige Notizen über die Farbe der Individuen beizufügen [→beizufügen], welches ich im nächsten Jahre sicher thun [→tun] werde, wo ich mich ausführlich mit Reptilien beschäftigen werde, um von dem dieselben [→denselben] im Falle Sie Toyoske zeichnen kann gleich die Fische und Crustacean, jährliche Lieferungen von Zeichnungen und Beschreibungen zu versenden. Von Ihrem großen Molch aus den Gebirgen von Nippon, befinden sich auch wiederum zwey [→zwei] schöne Exemplare bei der diesjährigen Versendung [→Sendung] als auch einige sehr seltene Saurier.

Vogels [→Vögel] habe ich in diesem Jahre sehr vollständig zusammengebracht. [Die] Reisen über Kiusiu [→Kyushu] und Nippon haben das meiste geliefert. Die diesjährige Besendung [→Sendung] beläuft sich ungefähr auf 160 Species in 600 Exemplaren, worunter

Sie

Sie verschiedene noch durch Ihnen alhier nicht vorgefun-
dene finden werden, es sol mir sehr angenehm seyn
auch hierüber das eine oder andere von Ihnen zu ver-
nehmen. —

An Säugethiere: endlich, finden Sie bei der diesjährigen
Besendung, die zwey Species *Peromys* in duplo, einige
seltene Chiropteren, als eine Species *Rhinolophus*, die
ich glaube, noch nicht in Ihrer Versammlung gesehen zu
haben, und eine Var. von Ihrer *Condylura japonica*, auch
vielleicht einige neue Meuse, Ich habe alles versondert und
Villeneuve hat auf sich genommen Ihnen von meiner
diesjährigen Versendung Abschriften noch an Bord zu
machen, und solche mit diesem Briefe zu versenden; —

Was nun Botanik. anbelangt, so ist bereits im vergan-
genem Jahre, eine ansehnliche Besendung von lebende Pflanzen,
Samerceien, als auch ein Herbarium versonden, ich hoffe dass
alles dieses glücklich in Ihren Händen gekommen ist, in
diesem Jahre habe ich mich genau an die Vorschriften
welche Sie mir in Ihrem Briefe mittheilen gehalten,
und Sie erhalten alle die getragte Pflanzen in triplo,
Je selbst in quadruplo, und Samerceien so viel als mir
nur immer möglich war zusammen zu bringen.] — Es
ist in diesem Jahre vom Gouvernemente eine Million

Threesaat

Sie verschiedene noch durch Ihnen alhier [→hier] nicht vorgefundene finden werden, es sol(l) mir sehr angenehm seyn [→sein] auch hierüber das eine oder andere von Ihnen zu vernehmen.

An [→Über] Säugetiere: endlich, finden Sie bei der diesjährig(en) Besendung [→Sendung] die zwey [→zwei] Spezies Pteromys in duplo, einige seltene Chiropteren [→Fledermäuse], als eine Species Phinolophus, die ich glaube, noch nicht in Ihrer Versammlung [→Sammlung] gesehen zu haben, ~~und~~ eine Var(Variante?): von Ihres [→Ihrem] Condylura Japonica, auch vielleicht einige neue Meuse [→Mäuse] ; Ich habe alles versonden [→versendet] und Villeneuve hat [es] auf sich genommen Ihnen von meiner diesjährigen Versendung [→Sendung] Abschriften noch an Bord zu machen, und solche [→sogleich?] mit diesem Brief zu versenden.

Was nun Botanik anbelangt, so ist bereits im vergangenen Jahre, eine ansehnliche Besendung [→Sendung] von lebende(n) Pflanzen Sämereien [→Samen], als auch ein Herbarium versonden [→versendet worden]. Ich hoffe, dass (sie) alles dieses glücklich in Ihren [→Ihre] Händen [→Hände] gekommen ist, In diesem Jahre habe ich mich genau an die Vorschriften, welche Sie mir in Ihrem Briefe mittheilen [→mitteilten] gehalten, und Sie erhalten (über) alle die gefragte(n) Pflanzen in triple [→dreifacher], ja selbst in quadruplo [→vierfacher], und Sämereien [→Samen] so viel als (es) mir nur immer möglich war, zusammen zu bringen. Es ist in diesem Jahre vom Gouvernement eine Million

TeeSaat

Theesaat angefragt, mit viele andere oekonomische
 Samereien und Pflanzen, welches eine Besondung von
 mehr als 500 Kisten ausmacht. Sie können leicht denken
 das dadurch, der Schiffsraum vor Lebende Pflanzen
 einigermassen beschränkt ist, und das diese Commission
 viele Zeit und Arbeit gefordert hat, ich bin jedoch so
 glücklich gewesen am 25 KoK. Theesaad, in verschiedene
 Landschaften versammelt zusammenzubringen, und auf
 die einmal durch uns angewandene Weise, bereits hier
 in Japan in Kisten gesamt zu versenden. Ich habe
 einige von diesen Kisten, als Wachs, Varnis, Cotton febrerung,
 u. s. w. für Europa bestimmt, und glaube das^{da ist} Ihnen
 dieses Freude machen wird, ich werde den Herrn Korthals
 hierüber schreiben, um sich auch im Allgemeinen, der
 Pflanzen und Samereien für Europa bestimmt anzuneh-
 men, und solche sobald als möglich zu versenden. —

Folgens Brief vom Herrn Diard, sind von meinen
 im vorigen Jahre gesendeten Theesaden bereits 250,000
 in guter Vegetation, und man kann mit Recht alles Gute
 von der Theekultur auf Java hoffen. —

Angehend Ihre Beziehungen auf Japan
 und ich hier ausweiten, um Ihnen umständlich alles
 hierüber mitzutheilen; Wir hatten folgens Ihren Wunsch
 Sonooji

TeeSaat [→Tee-Samen] angefragt, mit vielen anderen ökonomischen Samereien [→Samen] und Pflanzen, welches eine Besondung [→Sendung] von mehr als 500 Kisten ausmacht; Sie können (sich) leicht denken dass dadurch, der Schiffsraum von lebende Pflanzen einigsd [einigermaßen?] benommen (eingenommen) ist, und dass diese Commission [→dieser Auftrag] viele Zeit und Arbeit gefordert [→erfordert] hat, ich bin jedoch so glücklich gewesen vom 25 Kok' (?) Theezaad [→Tee-Samen], in verschiedenen Landschaften ver(ge)sammelt zusammenzubringen, und dass (?) die einmal durch uns angenommene Weise, bereits hier in Japan in Kisten gesact [→verpackt?] zu versenden. Ich habe einige von diesen Kisten, als Wachs, Vernis, Ciston febriferium k.sso (?) für Europa bestimmt, und da ich glaube dass Ihnen dieses Freude machen wird, ich werde [→werde ich] dem Herrn Korthals hierüber schreiben, um sich auch im Allgemeinen, der Pflanzen und Samerey [→Samen] für Europa bestimmt anzunehmen, und solche sobald als [→wie] möglich zu versenden.

Folgens [→Dem] Brief vom [→von] Herrn Diard (nach) sind von meinem im vorigen Jahre gesondenen [versendeten] Teezaden [→Tee-Samen] bereits 250.000 in guter Vegetationen, und man kann mit Recht alles Gute von den Teekulturen auf Java hoffen.

Angehend Ihrer Beziehungen auf [→in] Japan Wel [→will] ich hier ausweiten, um Ihnen umständlich Alles hierüber mitzutheilen [→mitzuteilen]. Wir hatten folgens [→folgend] Ihrem Wunsche

Sonoogi

Sonooji selbst die $\text{fl}1000$ Konstant in Händen gegeben, um
solche bei Ihrem Oheim zu deponiren, welches Sie auch ge-
than hat. Da jedoch der Oheim Sie mit einem begabten
Freund verheirathen wollte, wozu Sie wenig Lust hatte, hat
Sie im Frühjahre 1831 das Haas deselben verlassen, und ist mit
einem zwar noch jungen, doch allen Anscheine nach braven
arbeitfamen Mann, verheirathet, derselbe ist ein Karstarbeiter
doch noch in der Lehre, und wird sich erst im nächstem Jahre
selbst etabliren. - Da Nieuwe um diese Zeit nach
Batavia war, habe ich mich als sein Bevollmächtigter
der Sache angenommen, doch bis Zurückkunft von demselben
mit den diesjährigen Schiften, das Geld vom Oheim nicht zurück-
fordern wollen, obgleich dieses eigentlich der Wunsch von
Sonooji war, doch nach dem Todefälle Ihres alteren Schwester
meiner guten Zitiere die Mutter von meinem kleinen Asakits
haben wir dieses Kapital mit Hilfe zurückgenommen, und
auf Intressen bei den Kompradoors gesetzt. Ich hatte
nämlich früher für meinen kleinen Asakits, ein sehr
nettes Bürgerhaus mit Pakhaus und Eubehoren in der
Koziamats gekauft, welches mir, ohngefahr $\text{fl}1000$ kostet
kostet; da nun nach dem Todefälle seiner Mutter
Asakits wiederum bei mir auf Dezima ist, und Sonooji
Ihrer Schwester auf dem Sterbebette heilig hat ver-
sprechen

Sonoogi selbst die 1000 Thijl Kontant in (die) Händen gegeben, um solche bei ihrem Oheim [→Onkel] te [→zu] deponieren, welches sie auch gethan [→getan] hat. Da jedoch der Oheim [→Onkel] sie mit einem bejahrten Freund verheiraten wollte, wozu sie wenig Lust hatte, hat sie im Frühjahr 1831 das Haus desselben verlassen und is[t] mit einem zwar noch jungen, doch allem Anscheine nach braven arbeitsamen Mann verheiratet. Derselbe ist ein Karetarbeiter [→Karette-Arbeiter], doch noch in der Lehre, und wird sich erst im nächsten Jahre selbst etablieren. Da Villeneuve um diese Zeit nach (in) Batavia war, habe ich mich als sein Bevollmächtigter der Sache angenommen, doch bis zur Zurückkunft [→Rückkehr] von demselben mit den diesjährigen Schiffen, das Geld vom Oheim [→Onkel] nicht zurückfordern wollen, obgleich dieses eigentlich der Wunsch von Sonoogi war; Doch nach dem Todesfall Ihrer älteren Schwester, meiner guten Zitose die Mutter von meinem Kleinen Asakits, haben wir dieses Kapital mit Mühe zurückgenommen und auf Interessen [→Zinsen] bei den Kompradoors gesetzt. Ich hatte nämlich früher für meinen kleinen Asakits, ein sehr nettes Bürgerhaus mit Pakhaus [→Lagerhaus] und Zubehör in der Koziamats gekauft, welches mir [→mich] ungefähr 1000 Thijl Kontant kostet; Da nun nach dem Todesfall seiner Mutter Asakits wiederum bey [→bei] mir auf Dezima ist, und Sonoogi Ihrer Schwester auf dem Sterbebett heilig hat ver

Sprechen

...sprechen müssen, um bei Adakits, nach meiner Abreise
von Japan Shutterstelle zu vertreten, habe ich dieses Haus
zur Disposition von Sonoyi gesetzt, wo Sie den auch jetzt
sehr glücklich und zufrieden mit Ihnen Kanne und der
Kleinen lieben Oine lebt. Für Haushaltungssachen habe
ich mich mit Villeneuve verständigigt, und um Ihr auch
diese ein Jahr allemahl anzuschaffen eine Summe von
13150 ausgegeben, welches Sie aus Ihren Rechnungen mit
Villeneuve ersuchen werden. -

Da jedoch ein Kapital von 13000 welches jetzt
auf 12 pro: Cent by den Kompradoor ausgesetzt und sonach
1310 monatlich Intressen liefert, nicht genug ist, um mit
einer Kleinen Haushaltung davon zu leben, habe ich Vil-
leneuve proponiret, Ihnen einen Antheil in unsren parti-
culieren Handel für dieses Jahr von 7500 zu geben
wofür hier c. c. 13500 Kontant geld herausgekommen sind.
Diese 13500 Kontant haben wir bey die 131000 gefügt, so
dass jetzt by den Kompradoors ein Kapital von 131500
liegt, welches monatlich 1315 Intresse trägt. Sonoyi
erhält nun seit den 1 Sept. c. c. monatlich 1315 Kontant
Intresse, wovon Sie ziemlich gut leben kann, doch
habe ich Ihr versprochen Ihnen alles dieses ausführlich
zu schreiben, und zu bewegen dieses Kapital im folgenden
Jahre noch mit 13500 zu erhöhen, so dass es 132000
Kontant

sprechen müssen, um bei Asakits, nach meiner Abreise von Japan (die) Mutterstelle [→Mutterrolle] zu vertreten, habe ich dieses Haus zur Disposition von Sonoogi gesetzt, wo Sie den(n) dann auch jetzt sehr glücklich und zufrieden mit Ihrem Manne und der kleinen lieben Oine lebt. Für Haushaltssachen habe ich mich mit Villeneuve verständigt, und um Ihr auch diese ein für allemal [→allemal] anzuschaffen einer Summa van [→von] 150 Thijl ausgegeben, welches Sie aus Ihren Rechnungen mit Villeneuve ersehen werden.

Da jedoch ein Kapitaal [→Kapital] von 1000 Thijl, welches jetzt auf 12 pro:Cent by [→bei] den Kompradoor aus [→an]gesetzt und danach 10 Thijl monatlich Interessen [→Zinsen] liefert, nicht genug ist, um mit einer kleinen Haushaltung davon zu leben, habe ich Villeneuve propostiert [→vorgeschlagen], ihnen einen Antheil [→Anteil] in unserem particulieren [→besonderen] Handel für diese Jahr von 1,500 zu geben, wofür hier c.c.(?) 500 Thijl Kontant Geld herausgekommen sind. Diese 500 Thijl Kontant haben wir bey [→zu] den 1000 Thijl (zu)gefügt, so dass jetzt by [→bei] den Kompradoors ein Kapitaal [→Kapital] von 1500 Thijl liegt, welches monatlich 15 Thijl Interesse [→Zinsen] trägt. Sonoogi erhält nun seit dem 1. September c.c.(?) monathlich [→monatlich] 15 Thijl Kontant Interesse [→Zinsen], wovon Sie ziemlich gut leben kann, doch habe ich Ihr versprochen Ihnen alles dieses ausführlich zu schreiben und (Sie) zu bewegen dieses Kapitaal [→Kapital] im folgenden Jahre noch mit [→um] 500 Thijl zu erhöhen, so darf es 2000 Thijl

Kontant

Kontant wird, welches alsdan erst genueg seyn wird, um
ongesert. leben zu können. auch nach meiner ungegl
is 151000 zu wenig, um von den Intressen mit Familie
zu leben, doch 152000 Kontant hinlanglich genug. —

Für meinen Asakits habe ich 153000 bestimmt, und
auch bei den Kompradoors bewahrt, da dieses doch das sicherste
is. Ueber Ihren Kapitale, haben wir noch nichts anders be-
schlossen, als es Intressen tragend bei den Kompradoor
liegen zu lassen. bis von Ihnen Nachrichten einlaufen,
wie lange dies Geld bei den Kompradoors mag liegen
bleiben, es sey bis zu einem gewissen Alter von Sine
oder wie Sie es beschließen wollen. —

Sine kommt oft auf Dejima, ich Sorge für dieselbe
soviel als ich nur kann, es ist ein allerliebster Knab gewor-
den, und Sonoogi hängt mit Liebe und Dankbarkeit an
Ihren, und wird immer wehmützig bewegt, wenn von
Ihren die Rede ist. Wenn ich nach der Stadt gehe, komme
ich jedesmal von selbst, da Sie in meinem Hause wohnt
bei Ihr, ich bin verschiedene male in diesem Jahre
mit Kelenewe dort gewesen. —

Neues weiß ich Ihnen nicht vieles zu schreiben
es ist auf Dejima noch alles beym Alten, wir
haben ein neues Opperhoofd Herrn von Citters und ein
neuen Pakhuismester, einen sehr gebildeten und
selbst

Kontant wird, welches alsdann [→dann] erst genug sein wird, um ungesorgt [→unbesorgt] leben zu können; auch nach meiner Magd(?) ist 1000 Thijl zu wenig, um von den Interessen [→Zinsen] mit Familie zu leben, doch 2000 Thijl Kontant (ist) hinlänglich genug.

Für meinen Asakits habe ich 3000 Thijl bestimmt und auch bei den Kompradoors bezahlt, da dieses doch das sicherste is(t). Über Ihrem [→Ihr] Kapitale haben wir noch nichts anderes beschlossen, als es Interessen [→Zinsen] tragend bei den Kompradoor liegen zu lassen, bis von Ihnen Nachrichten einlaufen wie lange dieses Geld bei den Kompradoors mag liegen bleiben, es sey [→sei] bis zu einem gewissen Alter von Oine oder wie Sie es beschließen wollen.

Oine kommt oft auf [→nach] Dezima, ich Sorge für dieselbe [→sie] soviel als ich nur kann, es ist ein allerliebstes Kind geworden, und Sonoogi hängt mit Liebe und Dankbarkeit an Ihnen und wird immer wehmütig bewegt, wenn von Ihnen die Rede ist. Wenn ich nach der (in die) Stadt gehe, komme ich jedesmal von selbst, da Sie in meinem Hause wohnt bei Ihr, ich bin verschiedene Male in diesem Jahre mit Vielleneuwe dort gewesen.

Neues weiß ich Ihnen nicht vieles zu schreiben, es ist auf Dezima nach Alles beym (beim) Alten, wir haben ein neues Opperhoofft Herrn von Citters und ein(en) neuen Pakhuismeester, einen sehr gebildeten und

selbst

gelehrten Mann Namens Neman bekommen. Aber
 was sagen Sie von Meylans Tod? (Musste der gute
 Mann von Japan weg um auf Batavia in sein geöffnetes
 Grab zu steigen; er soll als Märtyrer gestorben seyn, ~~an~~
 einer scirrosen Entartung der Parotis, die durch Ihren Druck
 auf die Gefäße und Nerven des Halses ihn über drei Monate
 lang nicht schlafen und nicht schlucken ließ. — Vistorius
 verläßt auch in diesem Jahre mit ein gutes Capital Japan
 und wird Allen Anschein nach nicht zurückkommen;
 ein gleiches denke ich von Manuel fürs kommende Jahr;
Gonoffke ist in diesem Frühjahr gestorben, ich habe
 aus seiner Nachlassenschaft seine Übersetzung von Morijis
 chinesisches Dictionnaire gekauft, und lasse jetzt gut
 japanisch dabey schreiben, ich werde Ihnen im nächst
 Theile die erste zwey Theile senden können. —

Kellernwe, geht in diesem Jahre wiederum
 nach Batavia, doch kommt so Gott wil im nächstem
 Jahre zurück, wir haben Ihre Bestellungen so viel
 als möglich zusammengebracht, und ich hoffe daß
 Alles nach Wunsche ausfallen wird; auch habe ich
 einige Lichen als Beiträge für Ihre Versammlung
 beigefügt, welche Sie als ein kl. Beweis meines
 Dankgefühls nicht verschmähen werden anzunehmen

Joh

gelehrten Mann namens [→namens] Nieman bekommen. Aber was sagen Sie von Meylans Tod? Musste der gute Mann von Japan weg, um in Batavia in sein geöffnetes Grab zu steigen! Er soll als Märtyrer gestorben seyn [→sein], an einer (seriösen/ernsten?) Entartung der Parotid (gland), die durch ihren Druck auf die Gefäße und Nerven des Halses ihn über drei Monate lang nicht schlafen und nicht schlingen [→essen] liess. Pistorius verlässt auch in diesem Jahre mit ein(em) guten Capitaal [→Kapital] Japan und wird allem Anschein nach nicht zurückkommen, ein gleiches denke ich von Manuel fürs kommende Jahre. Gonoske ist in diesem Frühjahr gestorben, ich habe aus seiner Nachlassenschaft seine Übersetzung von Morrison chinesisches Dictionner [→Wörterbuch] gekauft und lasse jetzt gut japanisch dabey [→dazu] schreiben, ich werde Ihnen im nächsten Theile [→Teil] die erste(n) zwey [→zwei] Teile senden können.

Vielleneuve, gehet [→geht] in diesem Jahre wiederum nach Batavia, doch kommt so Gott will im nächsten Jahre zurück, wir haben Ihre Bestellungen so viel als [→so gut wie] möglich zusammengebracht, und ich hoffe dass alles nach [→Ihrem] Wunsche ausfallen wird; auch habe ich einige Sachen als Beiträge für Ihre Versammlung [→Sammlung] beigefügt, welche Sie als ein(en) kleinen Beweis meines Dankgefühls nicht verschmähen werden anzunehmen.

Ich

Ich werde jährlich mehr in Gelegenheit seyn
um Ihnen alle gefragte Sachen von Japan zu verschaff
Da auf Depima bereits alles wieder auf den alten Stand
ist. Sie müssen darum nur ganzlich über mich befriedigt
und mir unverholten schreiben, womit ich Ihnen
fürs nächste Jahr das meiste Vergnügen machen kann

Leben Sie wohl, und vergnügt, und vergesse
Sie nicht zu antwort. an

Ihren

treu ergeb. Freund

J. M. Bürger

(In möglichster Eile)

P.S. Können Sie mir mit einiger Litteratur helfen
so ist dieses mir immer das Angenehmste was Sie mir send
können, den Beitrag ersuche ich nur immer, auf Bezug
van Villeneuve zu setzen, mit welcher ich dasselbe sodann
gefragt in Japan verrede kann. - Gerne möchte ich
den Diction d'Histoire Naturelle, die neueste Edition haben
Sie werden mich sehr verpflichten, wenn Sie dieses Werk
für mich aus Paris kommen lassen, und sobald als
möglich versenden. -

J. M. Bürger

Ich werde jährlich mehr in Gelegenheit seyn [→sein/die Gelegenheit haben],
um Ihnen alle gefragte Sachen von Japan zu verschaffen,
da auf Dezima bereits alles wieder auf den alten Tag
is [→alles wieder beim Alten ist], Sie müssen darum nur gänzlich über mich befinden
und mir unverholen schreiben, womit ich Ihnen
fürs nächste Jahr das meiste Vergnügen machen kann.

Leben Sie wohl und vergnügt, und vergessen
Sie nicht zu antworten, an

Ihren
Treu ergeben(en) Freund

(in möglichster Eile)

H. Bürger

Ps. Können Sie mir mit einiger Literatur helfen
so ist dieses mir immer das Angenehmste was Sie mir tun
können, den Betrag ersuche ich nur immer, auf Rechnung
von Vielleneuve zu setzen, mit welche ich dasselbe sodann
Genäglich (?) in Japan verrechnen kann. Gerne möchte ich
den Diction d'Historie Naturelle, die neuste Edition haben,
Sie werden mich sehr verpflichten, wenn Sie dieses Werk,
für mich aus Paris kommen lasse(n), und sobald als (wie)
möglich versenden.

Bürger

4. 翻訳文



1831年12月1日、出島にて
最も親愛なる友人へ!

1830年12月22日付のライデン発あなたからのとても大切な手紙は、今年の船ⁱで私の元へ到着しました。オランダへのあなたの無事到着ⁱⁱは、日本での我々の科学的なプロジェクトに対して(オランダで)さらに好ましいムードが見てとれることと同様に、私にとって非常に嬉しいことでした。そして私は本当に心底から喜びをもって、遠く離れたこちら(日本)のことについてあなたに取り急ぎお知らせいたします。昨年既にあなたに手紙を書きましたように、あなたが日本を出発した後ただちに、私は喜んで魚類に取りかかり、あなたの望みどおりの成果を上げています。それは今現在すでに400種の魚類をToyoske(トヨスケ)ⁱⁱⁱに生きている様にスケッチさせ、その内200種に私は詳しい説明を付けて送りました。それによりあなたはおそらく多くの新しい情報(新種)を見出すでしょう。私はあなたの指示を正確に把握し、既知のもの又未知のものすべてをスケッチさせ、とりわけ日本の湖沼や川の魚類をこの方法で網羅して、発送しました。前便の中にあなたは私がすでに100種を越えるまでに収集したところの多くの淡水魚を見出すことと思いますが、しかしまだ、描かれてないものがたくさんあります。全部合わせると、およそ700-800種の魚類があることを私はここで確認しました。その内すでに500-600種は詳しい説明を図版と共に分類し、発送するための準備が整っています。私はこれから毎年100点のサンプルを発送することを考えています。したがって、あなたは来年3回目の配達を得ることになります。(受け取られたら)これについて何かあなたのご意見をいただけたら嬉しく思います。

私はまた甲殻類について、魚類と同じように記述をはじめ、そしてそれらを描かせています。特に近年魚類は私にとって相当珍しいものになっています。

あなたは今年、その中から図版と共に25の説明文からなる最初の納品を受け取るでしょう。あなたがそのことをとても喜んだと、あなたの手紙の中で私に気づかせてください。あなたが日本で見つけた80種の甲殻類を介して、私はおよそ120(種)まで達しました。それらについては複製や圧力で乾燥させたもの(標本)として今年中に送ることができるでしょう。私はそれを翌年も続けます。そしてまた、ここにある既知のもの未知のものすべてトヨスケに画かせ、そして次の年もまた再び50種の図版と説明文を届けたいと望んでいます。

あなたは今年中に私の手元に入る爬虫類のすべてを受け取ります。それはおそらく完全なコレクションです。しかし、私は個々の色について何枚かのメモを添付することを忘れました。それについて、私は次の年、爬虫類について詳細に対処することにより必ず義務を果たします。(あなたが)トヨスケに課したように、私も魚類や甲殻類と同じように爬虫類についてもトヨスケに画かせたら、私は、その図版と説明文を毎年あなたに発送します。日本の山でのあなたの大きな山椒魚^{iv}から判定した、二つのとても綺麗な標本を今年の積荷として送ります。また同様に、若干の非常に珍しいトカゲも送ります。

鳥類について、私は今年完璧にまとめました。九州と日本(本州のことか)への旅行は最も多くのものをもたらしました。今年の発送物は600のサンプルの中からおよそ160種に達するものです。これらの中に、これまであなたが見ることがなかった異なったものを見出すでしょう。私

ⁱ 1831年はオランダ船2艘、6月29日・晦日に入津している。(『続長崎実録大成』長崎文献叢書第一集・第四巻、長崎文献社、1974年)

ⁱⁱ シーボルトは1830年7月7日、オランダのフリッセンゲン港に帰着した。(石山禎一・宮崎克則「シーボルトの生涯とその業績関係年表(1796-1832年)」、『西南学院大学 国際文化論集』26-1、2011年)

ⁱⁱⁱ Toyoske登与助(トヨスケ)、川原慶賀、(1786-1860以降)江戸時代後期の長崎の画家。出島出入絵師としてシーボルトの注文に応じ風俗画、肖像画に加え生物の詳細な写生図を描いた。

^{iv} Molch有尾類(イモリ・サンショウウオなど)。1826年、シーボルトは江戸参府の途上鈴鹿山中で大山椒魚を入手して大喜びした。(斎藤信記「シーボルト江戸参府中の日記」思文閣、1983年)

は、これに関してあなたから何らかのご意見をいただけたら大変幸せです。

哺乳類について、あなたはついに今年の船便で2種類のモモンガと若干の珍しい翼手類の蝙蝠を見ることができます。私はあなたのコレクションの中にそれらを未だ見たことがないと思います。1つの変種について、あなたの*Condylura Japonica*による1種の変種についてもそれらはおそらく若干の新種のネズミだと思えます。私はすべてを送ります。そしてVilleneuve(フィレニューフェ)^vは今年の船に乗せる荷物のためにすべてを複製しました。そしてすぐにこれらの手紙と一緒に発送されます。

植物に関して言えば、私は生きている植物を大きな船積み荷にして先年送りました。植物標本のコレクションも送りました。私はそれらがすべてあなたの手元に届くことを願っています。今年は前回あなたが手紙の中で知らせてくれた指示を私は固く守ります。そしてあなたはあなたが求めた3倍、又4倍もの植物を受け取るでしょう。そして私が可能な限り集めたたくさんの種を受け取るでしょう。

今年はオランダ東インド政庁^{vi}から他の商業用の種と植物と共に百万個のお茶の種の問い合わせがありました。それらは500個以上の箱に詰められています。船倉は生きた植物で占領されています。そして委託されたことを満たすには多くの時間と努力を必要としました。しかし私は幸運にも25Kok(種類又は包みか)のお茶の種を集めることができました。それらは異なった地域から集

めたものです。私たちはすでにこれらをここ日本で発送するために箱詰めしています。私はこれらをきつとワックスで封をしてヨーロッパに送ります。そしてそれらはあなたに喜びを与えるでしょう。私はKorthals氏にこのことについて手紙を書きます。彼はヨーロッパのために植物と種子の世話をし、そしてできる限り早くそれらを送るでしょう。

Diard氏からの手紙によると、昨年私が船便で送った茶の種およそ250,000は良く生育しており、そしてJava(ジャワ)でのお茶の文化の成功が望まれます。

あなたの日本における縁故関係について、私は詳細をすべて報告したいと思います。あなたの希望に従い、私たちがSonoogi(ソノギ、其扇)^{vii}に手渡していた1,000テール^{viii}の現金^{ix}を、彼女は彼女の伯父さんに預けていたのです。しかし、彼女の伯父さんは彼女が年配の友人と結婚することを望んでいたため、彼女は1831年春に伯父さんの家を去り、そして今彼女は正直で勤勉そうな若い人と結婚しています。この男性は鼈甲職人でも見習いですが、来年はプロとして独立するでしょう。フィレニューフェはこの時期バタヴィアにいたので、私は彼の代理人としてこの事情を受け入れました。しかしフィレニューフェが今年の船で戻ってくるまでは、私はソノギがそれを望んでいたにもかかわらず伯父さんに返金を要求しませんでした。しかし、彼女の姉であり私のよき人、そして私の小さいAsakits(アサキチ)^xの母であるZitose(チトセ、千歳)^{xi}の死後、私たちは苦心をしてこの資金を

^v Carel Hubert de Villeneuve(カレル・ヒュベルト・ドゥ・フィレニューフェ)、(1800-1874)。1825年、シーボルトの日本研究の助手として、薬剤師ビュルガーと共に来日。出島での役務は画家・書記。(古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人 後編』長崎文献社、1969年)。ビュルガーはこの手紙の中でVilleneuveと記載しているのもそのまます。

^{vi} Gouvernementオランダ東インド政庁(バタヴィア政庁)を示す場合と長崎奉行を意味する場合とがある、ここではオランダ東インド政庁とした。

^{vii} Sonoogi其扇(ソノウギ、ソノギ)、楠本滝(1807-1865)長崎丸山引田屋抱遊女、シーボルトの日本人妻。1827年女兒イネ(伊禰)出産。シーボルトは『Flora Japonica(日本植物誌)』において紫陽花に*Hydrangea Otaksa*と名を附している。(呉秀三『シーボルト先生その生涯及び功業1』平凡社、1967年)

^{viii} オランダ語でTail・Thail・Thijl(テール)、東インド会社(政府)の日本国内における取り引き用の貨幣単位で実際にそのような貨幣があったわけではない。1テールは2グルデン(ギルダー)に相当。グルデンは15世紀から2002年まで使われたオランダ通貨の名前。1テールは銀10目、6テールが金1両にあたる。(宮崎克則『シーボルト『NIPPON』の捕鯨図』(『九州大学総合博物館紀要』No.7、2009年)。

^{ix} 1000 Kontant シーボルトと別れた其扇は1830(天保元)年早々、伯父の家にお稲と共に引っ越し、シーボルトからの1,000テールの現金を伯父に預けている。(古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人 後編』長崎文献社、1969年)

^x Asakits(アサキチ)、ビュルガーと千歳の子供

^{xi} Zitose千歳(チトセ)、其扇の長姉常(ツネ)、ビュルガーの日本人妻。1831年7月没。シーボルト『NIPPON』の中の遊女像では「イトセ」と記されている。(呉秀三『シーボルト先生その生涯及び功業1』平凡社、1967年。古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人 後編』長崎文献社、1969年)

取り戻しました。そして私たちはKompradoors (コンプラ仲間)^{xii}に預けて利金を得るようにしました。以前、私は私の小さいアサキチのために倉庫付きの小ざっぱりした感じの良い家をKoziamats (麴屋町)^{xiii}に買いました。それは1,000テールの値段でした。しかし、母親の死後、アサキチは今、出島にいる私の側にいます。そして其扇は彼女の姉の死の床で、私が日本を去った後、アサキチの母親の役割をすると約束をしました。私はこの家を其扇が住めるようにしました。今彼女はそこに彼女の夫と可愛いOine (オィネ、阿伊禰)^{xiv}と一緒に幸せに暮らしています。私はフィレニューフェと家財道具について同意しました。それは未来においても調度品を調達できるようにするためです。合計150テールづつその都度使うことができます。いずれあなたはフィレニューフェによる請求書を見て取ることになるでしょう。

しかし一方で1,000テールの資本は十分ではありません。今はコンプラ仲間から12パーセントの利子もらい、それは月に10テールの利益になります。それは私たちの小さい家での家計にとっても、十分ではありません。私はフィレニューフェに今年1,500テールの特別の商取引をすることを申し出ました。ここから500テールの現金が出ます。この現金を1,000テールに加えるとコンプラ仲間への資金が1,500テールになり、月々15テールの利益がもたらされます。其扇は9月1日から毎月15テールを利息として受け取っています。このことにより彼らは心地よく生活しています。そして私は彼女に私があなたに詳細について手紙を書き、そして資金を次の年に500テール増やして2,000テールに上げることをあなたに納得させると約

束しました。その額は心配なく生活するのに十分でしょう。私の召使いさえ家族と生活するには1,000テールからの利子では少ないと(言っており)、資金が2,000テールあれば本当に十分なのです。

アサキチのために私は3,000テールを決めています。そしてすでにコンプラ仲間へ渡しています。その方法が安全だからです。あなたの資金については、私たちは決めていません。あなたからのメッセージを受け取るまで利子をもたらずコンプラ仲間に残したままにしています。その期限は阿伊禰がある年齢に達するまでか、またはあなたが望む時までなのか(決めてください)。

阿伊禰はしばしばDezima (デジマ、出島)に來ます。私が氣遣うことができるのと同じようにたくさんです。彼女はとても魅力的な子供になりました。そして其扇はあなたへの愛と感謝をもってあなたのことを心配しています。あなたに話が及ぶと常に悲しげにあなたのことを氣遣っています。私は町へ行くと、毎回単独で私の家へ行きますが、そこにあなたは彼女と一緒に住んでいます。私は、今年はそのフィレニューフェと何度も一緒に行きました。

私はあなたに書くべき新しいニュースがそれほど多くないと知っています。それは出島においては相変わらずのことです。私たちは新しい商館長Citters (シッテルス)^{xv}と新しい荷蔵役^{xvi}で、非常に教養があり、学識があるNiemann (ニーマン)^{xvii}と言う名の人を迎えました。しかし、あなたはMeylan (メイラン)^{xviii}の死をどう思います

^{xii} Kompradoors (compradoors) コンプラ仲間 (諸色売込人)、長崎町年寄の配下で町政の事務を担当した乙名に属する食料等売込商人で「諸色売込株」を保有する商人に限られていた。「コンプラ仲間(社)」と自称し、これを刻んだ方印を用いていた。醤油等の輸出も行った。(日蘭学会『長崎オランダ商館日記 四』雄松堂、1992年。三浦忍「出島諸色売込人(コンプラ仲間)について-『長崎仲間株相伝録』-」『調査と研究』(20)長崎県立大学国際文化経済研究所、1989年)。「日本の小商品類の引き渡しに当っては、諸色売込人(Compradoors)は非常に公平であり、最高の品を供給してくれる。」とフィッセル(1820~1829書記・荷倉役として出島に在任)は諸色売込人に信頼をおいている。(庄司三郎・沼田次郎訳注『日本風俗備考2』平凡社、1978年)

^{xiii} Koziamats 麴屋町 (現在長崎市麴屋町)

^{xiv} Oine 阿伊禰(オィネ) (1827-1903)、シーボルトと其扇の娘、1871年、異母弟にあたるシーボルト兄弟(兄アレクサンダー、弟ハイリッヒ)の支援で東京築地に開業したのち、福沢諭吉の口添えにより宮内省御用掛となる。

^{xv} Jan Willem Fredrik van Citters (ヤン・ウィレム・フレドリック・ファン・シッテルス)、Meijlan (メイラン)の後任のオランダ商館長(1830.11.1~1834.11.30在任)

^{xvi} Pakhuismeester オランダ語で荷倉役。

^{xvii} Johannes Erdewin Niemann (ヨハネス・エドウィン・ニーマン)、1831年は荷倉役として来日。後年オランダ商館長(1834.12.1~1838.11.17在任)を務めた。

^{xviii} Germain Felix Meijlan (ヘルマイン・フェリックス・メイラン)(1785-1831)、オランダ商館長(1826.8.4~1830.11.1在任)、清潔潔白で温厚な人柄は長崎奉行、シーボルト、東インド政庁役人らが称賛。パタヴィア帰任後数カ月で死去。『日本』(1830年刊)、『日欧貿易概観』(1833年刊)の著書がある。(永積洋子「オランダ商館の協荷貿易について-商館長メイランの設立した個人貿易協会(1826~30)」『日本歴史』379号、吉川弘文館、1979年)

か? 良い男が日本を離れて、Batavia(バタヴィア)で墓穴を開いて下りなければならないなんて!彼は殉教者として死んだのです。深刻な耳下腺の退化、それは血圧と首の神経を介して彼を3カ月以上の間、眠れず、食事も呑み込めない状態にしました。Pistorius(ピストリウス)^{xix}も又今年良い資本とともに日本を離れます。そしてあらゆる様子からもう戻ってこないと思います。同様にManuel(マニユエル)^{xx}が今年来ると思います。Gonoske(ゴンノスケ、権之助)^{xxi}は今年の春亡くなりました。私は彼の遺産である彼が訳したMorrison(モリソン)^{xxii}の「中国語辞書」を買いました。そしてそれを今良い日本語に書かせています。私はあなたに次の章の最初の2部を送ることができますでしょう。

フィレニューフェは今年またもやバタヴィアへ行きます。しかし彼は神の思召しで来年戻ってきます。私たちはあなたの注文を共にできるだけ送り届けます。そして私は、すべてがあなたの希望通りになることを望みます。そして私はあなたのコレクションに何らかの貢献ができるようにいくつかのものを加えました。それが私の真実の感謝の小さな証拠としてあなたに退けられることなく受け入れられますように。

私は毎年、あなたの求めた日本のすべてのものを集めるためにより多くの機会を得るでしょう。ここ出島では再び古い日のすべてがおよそそのままであるように。あなたははたがって、私に何ができるかを包み隠さず書いて

ください。それでもって私が来年あなたのために最も多くの楽しみを作ることができます。

お元気で、お幸せに、そして返事を忘れないでください。

あなたの
忠実で従順な友人
〔取り急ぎ〕
H. Bürger(ビュルガー)

追伸:あなたは若干の文献で私を手伝っていただけませんか?それはあなたが私にできる最も心地よいものなのです。私は、日本で収支報告が通ることができるようにフィレニューフェを請求書の代表として置いてくれるようにあなたにお願いします。私は“Diction d'Historie Naturelle”の最新版を欲しています。私はあなたがパリからできるだけ早くその本を送っていただけると大変感謝いたします。

Bürger(ビュルガー)

^{xix} P. W. Verkerk Pistorius(ピストリウス)、オランダ商館員。1828年に数度目の来日をしていて、シーボルトに協力して「長崎港への入港指針」など作成。(栗原福也『シーボルトの日本報告』平凡社、2009年。古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人 後編』長崎文献社、1969年)

^{xx} S. G. Manuel(マニユエル)、オランダ商館員。カペレン海峡(下関)の地図、長崎港および周辺の地図など作成。(栗原福也『シーボルトの日本報告』平凡社、2009年)

^{xxi} Gonoske 吉雄権之助(ヨシオーゴンノスケ)、(1785-1831)江戸時代後期のオランダ通詞、シーボルトの通訳を務めた。わが国最初の英和辞書「諸厄利亜(アングリア)語林大成」の編集、蘭日辞書「ズーフーハルマ」の訳編にも加わった。この年天保2年5月21日没。

^{xxii} Robert Morrison(モリソン)、(1782-1834)、イギリス人宣教師、ロンドン伝道会より中国に派遣、『華英字典』(1823年)の編纂者。

